
魔法と剣のある異世界物語

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と剣のある異世界物語

【Zコード】

Z7255Y

【作者名】

リン

【あらすじ】

平成の世、すべての武を極めし齢17の青年がいた。彼はあらゆる達人を凌ぐ武の才を持つている、幼い頃から武に関わり、そして極めてきたその力を学校の同級生は知らない。学校では急け者と呼ばれている彼がある日、いわくつきの廃墟へ男一人と女一人の計4人で肝試しをすることとなつた。そこで彼らは異世界へと迷いこみ、様々な敵と、仲間と出会い生きていく物語。

プロローグ

夕暮れの傾く空の下、齢17の青年は眠氣を誘う表情と茶色の学生服を着こなし、片手に皮鞄を背負つて町外れの川沿いを一人歩いていた。

周囲には人氣はない、この時間帯この場所は街灯もなく人の通りが少ないため、何より薄氣味の悪い一軒家があるから、街の人々はあまり近づこうとしない。

この道をこの時間に利用するのはおそらく自分くらいだろう。そういう自覚している。

青年 - - - 龍翠・翠真は川のほとりにある古ぼけた一軒家の前に立つと眺めるようにしてそれを見据えた。

古ぼけた一軒家には昔から奇妙な噂がある。夜の1-2時に一人で家の中に入り

風呂場で『カルガギ』と意味ありげな言葉を口にすると、風呂場の中に吸い込まれて

異次元に飛ばされる、とか、深夜の2時に家の中に入つて『ザルカベシン』捕まえた

とか言えど、家の座敷の下から『ザルカベシン』という異形な者が現れて異世界へ

呼んだものを連れ去るとか、どれもこれも異次元や異世界などこの世界とは別の空間

へ連れていつてしまつのような話ばかり、その噂の元となつたのが

この家の住人の

失踪事件だ、翠真も幼い頃新聞などで読んだことがある。

それは13年前、夜の12～4時にかけて一家3人が行方不明になつた事件だ。

失踪原因は不明、今もその家族は見つかっておらず煙のように消えたのだ。

しかし、行方不明だけだとこれほどまでに噂は広がらない。噂の広まりを加速させたのは

次女や長女の部屋から見つかった、薄い赤に塗りつぶされた手紙と人形だった。

手紙にはカルガギ、人形にはザルカベシソと血字で書かれていた。手紙にはカルガギ、人形にはザルカベシソと血字で書かれていた

いつ。

当時、それは黒魔術の一種では、という意見も上がったようだが、この世界に

魔法など非科学的なモノは存在しないはずだ。

実際翠真自身多くの人を見てきたが魔法など使う人間はいなかつた。

しかし、それは自分が知るかぎりの話、もしかすると黒魔術は実在し

表の世には知られぬように極秘裏に行われているのかも、幽霊や魂といった科学では証明しようのない存在はこの世界に五万といるのである。

更に拍車をかける用に5年ほど立つた頃この家に肝試しに来た学生二人がその晩

行方不明なり、消息をたつた。それから多くの若者が肝試しに入り

それらは帰つて来なかつた。そんな家の中に今日は友達三人と入ることになつてゐる。

若氣の至りとでも言つのか、不思議なものに興味を持つた子供が

興味心のまま突っ走ると言つた、とにかく愚か極まりない行為だ。

しかし、おそらく、必ず、彼らは翠真抜きでも肝試しを決行するだろう。

今は夏、夕暮れでもわずかに暑苦しく、何より学生の遊びたいさかりの季節。

さらに言えば、男一人と女一人それだけなら放置しても構わないがその一人の男が監視しなければならない存在だった。

二人の女は幼馴染で昔からよく口を交わす仲、そしてもう一人の

男は

高校に入つて一人にやたら好意を寄せる危険極まりないド変態。武に精通する者としてそのよつた危険な存在と屋根の下を潜らせるわけにはいかない。

「はあーあ、眠いな。さつさと帰るか、下調べもすんだことだし」

翠真は体を反転させ、廃墟を背にしたまま水辺から路上へ復帰しそのまま歩道を歩く。

翠真は大きな佇まいの屋敷の門を一步地面を蹴つて抜ける。無数の高級感漂う砂利の置かれた庭を抜け、巨大な屋敷の中へ足を踏み入ると

靴を脱ぎ、綺麗に揃え、光沢を放つ木の板を踏みしめて目的の部屋まで

歩み寄る。駄の前に立つと扉を開き、中へと入った。

同時に座り込む老人から声が上がる。

「^{スマ}翠真あらゆる武術を極めしお前に今日も挑戦者だ、

相手をしてやれ」

「私に挑戦者……まだですか。一年前からやたらと増えましたね」

「ああ、お前がすべての武を極めたからな。今思えば地獄のような特訓の日々じやつた」

白髪の老人に似た様相の父が長いあごひげを撫でながら自分の事のようだ

そういう、父はすべての武術を身につけるために全世界をわたり、そして

常人の域を超えた領域まで踏み込んだ達人に並び称されるほどの男。

そんな、最強の称号を得た父だったが、翠真は歳16の頃そんな父をも超えた。

あらゆる武術を極め、あらゆる達人と死闘を繰り広げ
幾度も死線をくぐり抜けてきた若き武の化身。

それが天下無双流継承者、龍翠・翠真。

「父上がまるで地獄を経験したようないいようですね……実際は私が死ぬ気でこなした修行なのに」

「そりやーそうじやろ？ ワシの特訓装置の実験台はワシ自身だったのじやからな

まあーとにかく、道場にお前の相手が待つておられる。天下無双流の力見せてやれ」

笑いながら父はそういう。その光景はまるで孫とおじいさんのような光景に傍目から見れば

見えるだろうが、目の前にいるシワの無数にある老人はれつきとした父である。

46歳の頃23歳の女性と恋に落ち結婚、子作りに励み、47歳でスイマを授かりる

そして育てた。だからこそ現在64歳という高齢者、それでも武の力は世界で一番目と称されるほどの力を秘めている。化物のような老人だ。

翠真はそんな父に背を見せ、両目にかかる黒髪を風に揺らせながら道場へと足を進めた。

最強と言う名の称号を授かつて一年、数多くの武術家と戦いそして勝利してきた。今日もそれは変わらない。

道場の扉を開き、中へと入る。中には全身から氣を放つ黒髪の男の後ろ姿がありそれを見据えて声を上げた。

「私の挑戦者とはあなたですか？」

甲高い声が小さな背の男からほとばしり漏れる。

「ク力力力、そうだ、あんたの最強の称号、俺が頂きに参った。さあ、尋常に勝負勝負」

男は忍者服のような様相をしており猫のよつに素早く、体を翻しクナイを突如翠真に頬つた。

それを体を僅かに動かし避ける。

同時に背後の数に数本のクナイが突き刺さる音が漏れると、ずきんと口元を隠した男の顔が翠真の視界に写り込んだ。

片手には鎌を回転させ攻撃の構えをとつている。

「俺のクナイを避けるとは、だてに最強を召乗つてゐるわけではないな」

「別に私は最強を召乗つてゐるわけでも血運したいわけでないんですけどね」

周りが勝手にやつ言つてゐるだけですよ。特に父上が耳にタコができるほど毎朝毎晩言つてきますから、自分としてはこんな称号「ロード」箱に捨ててやりたいですよ

ほんと」

そう言いながら翠真はため息を吐くと、男に対して微笑を浮かべた。

「けれど、最強という称号はそつ安安捨てれないモノなんですよね……本当に」

面倒な称号を頂いたものですよ。ハハハ」

「ならば、俺にその称号を献上しやー！」

その声と共に男は足を加速させ、鎧鎌を回転させて頬つてくる。

「そうしたいのは山々なんですが、それはできないんですよ。負けてしまえば私は父上と戦わないとならない」

父上との戦いはどんな訓練よりも修練よりも辛いくツイものですから

そんなことするくらいなら貴方に勝利して風呂に入つて床につくほうが

いいじゃないですか？ですからすみません。今日は他にも予定が入つているので

じゃれあつてゐる暇はないんです。一瞬で終わらせます

男の頬でくる鎌を僅かな気道を読んで避け、男の懷に加速し、そして拳に込めた力を腕の筋力を利用して男の腹に叩きつけた。同時に男はうめき声と共に空中へ吹き飛び、天井にめり込み、数秒後落下。

たたきつけられた者と共に男は白由を向いて倒れこんだ。

それを見据えながら男の状態を確認する。

「肋が数本折れてるだけか、うん、これならまあ一相当痛いだろうけど

路上に出しどといいいかな。一応救急車も呼んどくか

翠真は携帯を取り出し、救急車を呼ぶと、男を家の前の門に横たわらせ

そのまま救急車の来るを待つて事情を説明した。

「本当に毎晩毎晩私たちの仕事増やさない出でださいよ……一日一

人重軽傷者を出され

いくら病室があつたてきりがあります

それに一礼しながら翠真は答える。

「すみません、次は怪我のないよつて死絶せます

「いや……まあとにかくお願ひしますよ」

そう言つて救急隊の人は車に乗り込み、サイレンを鳴らしながら家を去つていた。

それから4時間と立つた月明かりの眩しい暗闇の訪れた頃。

翠眞は欠伸をしつつ、無数に広がる砂利と月の光を反射する川の音を

耳にいれながら一軒のボロ屋の前に立っていた。

チェックの入った黒色の服を身に纏い黒色のジーパンを身につけてメロンパンをかじりながら前に佇む三人の男女に声を上げる。

「あのさあ一本當に入る氣？」

「もちろん！ だつて夏よ？ 夏つて言えば恋と祭りと肝試しじゃない！」

「二年生最後の夏休みファーバーしなくちや」

短髪で活発な明るい声音の口にする京子、

幼馴染で一軒隣の家に住む高級住宅街の住人である。

容姿は美人というよりも可愛らしいという方が的確で実際にそんな彼女の柄や可愛らしさとこうを好きになって告白する学生が多くいるという。それらはすべて撃沈で終わっているとか、

それに、長い髪の艶やかな髪の持ち主が言ひ。

「確かにそうだけど……なんどよりもよつてここのの……
私怖いよ……」

怯えるようにそう声を上げたのは水嶋・美月

真向かいの大きな屋敷に住まつ、海外に無数の油田を私有する日本で最も財ある家系のお嬢様。容姿は白く透き通るような肌と女優のように整つた顔つきの誰もが認める美少女。しかし性格はおとなしめで、好き好んで人と話そつとしない。心の友と呼べるのは

朝木・京子ぐらうだらう。

「大丈夫さー！」の大明寺・秋雨が付いている限り、美月様は私が守ります」

煙たい声を上げたのは、問題の男、だいみょううじあきさめ大明寺秋雨逆玉を狙うしがない工場長のひとり息子である。

茶髪で耳を覆い隠したくせ毛の田立つ世で言つチャラ男に數えられる男

どういうわけか、神はこの男に女たらしの美男子といつ才能を『えたらしい。

「秋雨くん？ 何をやつてゐるのかな？」

「何つて？」

「その手よ、その手、さつきから美月の背中を触つてゐるその手…」

「ああ、いやね、怖がつてゐから少し励まそつと思つて」

そんな秋雨に京子の背負い投げが送られ、秋雨は背を抑えながらゲホゲホと息を吐いた。

「京子、前よりも完成度上がつたんじゃないの？」

翠真が綺麗に決まつた背負い投げをした京子に対してもう言つとい、

「ええ、背負い投げなら黒帯にも引けを取らないって柔道の先生に言われたわ」

「へえーすゞいね。僕にも今度教えてよ」

「いいわよ。でも翠真にできるかな……？」

「うんー多分難しいと思つけど頑張るよ」

「そつか」

京子の猫のような可愛らしい笑を見ると翠真も微笑を浮かべる。学校での彼は運動能力ゼロ、体育の成績はいつもドベ、学問優秀万年眠そうな顔している怠け者として認知されていた。

そもそもうちに入つてくる柄の悪いひとたちの事は父上が相手をして毎晩送り返していくことになつていて、なにより、誰も同級生の中には翠真が武術に長けていることを知らないのだ。

翠真自身、それをばらす気も怠慢する気もない。

学校こそが平穏に暮らせる唯一のやすらぎの場所だから。

「ははは、レディーの投技なんて男の私には効きません」

背を抑えながら苦笑いを浮かべる秋雨に対し京子が小馬鹿にするような視線を送る。

それに秋雨は思わず顔を背け振り返り、そして声を上げた。

「も、目的を忘れちゃいかんよな、そうだよ。そうだとも。私たちの目的は

「この屋敷の謎の解明じゃないか！ よし、翠真！ 共に謎を解明しようじゃないか」

「あれ……今日は肝試しに来たんじゃないんだっけ？ いつから謎解きになつた？」

すると、突如、秋雨が翠真の首元を腕で拘束し耳元で焦るような意地の悪い声を口にする。

「とにかくだ、肝試しも謎解きでもどっちでもいいが、とにかく俺を彼女ら一人のどちらかと

一人つきりにしろ！ いいな？ 俺にとつて正直こんな場所には興味はない。

俺の興味はもともと京子ちゃんと美冴ちゃんだけだ。とにかく俺に協力しろ！」

それに翠真は即答する。

「断る！ お前を大切な幼馴染と一人つきりにするわけないだろ？」

「何……お前、俺とお前との友情を捨てるというのか？ 「ゴミみたいにポイつて

ポイ……」

「友情？ いつのまに私とお前との間でそんな友情が生まれたのだ

？」

「私つて……お前なんか今日変だぞ？ そこは僕だろうが！ てか俺とお前との間に

友情は成立していなかつたというのか？」

「まあー そうなるな。とにかく私は君の邪魔を全力でするつもりだ

「何……」

呆然とする秋雨を他所に京子が突然声を上げた。

「そろそろ時間だよ。一人が行かないなら私達だけでいくよ？」

それに美冴が両手を手に添えて頷く。

「秋雨、二人も呼んでることだし我々も行こう」

「あ……分かったよ」

それからすぐに彼女らの背後につけ廃墟へと足を踏み入れた。

廃墟の中には無数の埃が蔓延し、喉を突くような息苦しさがある。足場には無数の瓦礫が点在し、畳は腐っていたるかしこに穴が開いている。

四人は四人ともライトを片手にその空間を照らす。天井には無数の蜘蛛の巣がかかり壁には子供の落書きのようなものが映り込む。

そこで異様な部屋に四人は足を踏み入れる事となつた。それは問題の部屋。

長女と次女の部屋。

「何も……無い」

「なんか、この部屋怖いです……」

京子と美月の声が漏れると、翠真も口に出して言つ。

「本当に何も無い、瓦礫すら。一体どうなつてるんだ?」

四人の見た物は何も無い綺麗な白い部屋だった。

廃墟というのにこの空間だけは埃一つ、瓦礫一つないのだ。

「ねえ……そろそろ1・2時よ、やつぱり帰らない?
なんだかこの部屋変よ! 掃除もしてないのに元気ひとつないな
んてありえないわ」

喉のふるえる声で京子が言つと、氣落ちしていた秋雨が声を上げ

る。

「確かに氣味の悪い部屋ですね。まるで誰かが毎晩掃除でもしているよつだ」

「ああ、この部屋は綺麗過ぎる」

「ねえー帰りましょつよ。早くしないと本当に1-2時になつてしましますよ?」

京子ちゃんとの恋つとめつ、早く……」

美月は顔をこわばらせ、京子の手を握りながらさういつ。それに翠真が言つ。

「やうだね、帰ろつ」

「それが正しい選択かもしれない。今度肝試しするならほかな幽靈スポットにしょつ。ここはリアルにやばそうだ。噂によれば深夜の1-2時にカルガギとか、サルガベシソ捕まえたとか言つたら異次元や異世界に消えるつて話だからな。とにかく早くこいつから出よつ」

「バカ!」

「な、何だ!」

「え? え? ハハハハハー」

それは何が起こつたのかわからなかつた。

一瞬眩しい光に包まれたと思えば、視界に突然大きな石が無数に点在する

遺跡のような場所を捉えたのだ。

足元には巨大な絵のかかれた岩があり、先ほどの廃墟とは全く別の空間にいるのだ

空には青々と雲が太陽が存在し、岩の先には平原が広がっている。

「なんなのこれ？ 夢？ ジャ……ないみたいね」

「おつきな平原ー」

「どこじゃーここわー！」

「……？」

それぞれが声を出し、一歩また一歩と足元の円の広がる場所から離れ

京子と美月そこに翠真がそこから降りた瞬間、再び円の描かれた石が輝き出し、そして光の中に秋雨だけが取り残され光と共に姿を消した。

同時に入れ違うように無数の青白い服を着た中世の兵士のような様相をした

男たちがその石の上に現れ、そして……

「不法侵入者だ！ 拘束しろー！」

「はー！」

それと同時に数人の男たちが空中に青色の円を作り出し何かを口にすると

それが光り輝き、同時に翠真を含める三人を泡の風船のような物が包み込み

そして耐えられないほどの睡魔に襲われ翠真は意識を失った。

プロローグ（後書き）

今回は予想以上字数がふくれあがつてしましました。分割も考えたのですがやはりプロローグは一発で、と思い6000字にも及ぶものとなりました。

長文申し訳ない。

1話・牢獄と翠真

薄暗く湿った空気が漂つ空間の鉄格子の向こう側、周囲を石の埋めこまれた壁で囲まれ

蠟燭の火が薄気味の悪い空気空間を作り、鉄格子の先に住む者を包み込んでいた。

「翠真、 じじじじだかわかる？」

凍てつて寒い空気の漂つ牢の中で暖かな聲音が反響し翠真の耳に入ると

翠真はそれを首を左右に振つて叫び。

「わからない……だが、一つだけ言える」とがある

「言える」と?

「それは……別の

そこで言葉は京子に遮られ、

「いや、その先は言わなくてもわかるわ……私だって小説や漫画で
いつも

世界の事は知ってるもの……」

片手を翠真の前に押し出し停止するかのよひにかひにした彼女に
続き、

美月が正座しながら蠟燭の光に集まつた蝶や虫の姿を眺め
面白そつこゆつくりとした柔らかな口調で言葉を口にする。

「はあー蝶蝶はいわよねえー自由天空を飛べて、私も蝶々になり

たい……」

「何言つての……？ 美月」

憧れるような幼い少女の瞳で蠅燭の方を見る少女に対して京子が心配げに

声を上げる、それに美月は我に返つたように京子の方を見て学校で見せる

微笑ましい男女瞬殺女神スマイルを浮かべた。

ある者が言つた、彼女の笑には女神の微笑を感じたと
大人しい性格でお嬢様、そしてなによりすべての者の心を射止めてしまふ

女神スマイル備え持つ彼女に一度微笑を浮かべられるとあらゆる男女が心を奪われ抜け殻のようになつてしまつといふ。

実際に翠真のクラスでは彼女の笑みを禍々と見てしまった生徒が一日中保健室で頬を赤らめて口を開いたまま石のようになつて固まっているのを

何度か目撃したことがあつた。

しかしそんな彼女の微笑でも撃沈されない存在がいる。
彼女への免疫を持つている存在、それが翠真と京子だった。

「こり！ 今は天然系を装わなくていいの！ だから私たちの会話に混ざりさなさい！」

「ええ～」

その言葉を聞いて京子が拳に息を吐きかけ、獲物を射るような目で美月を見据えて
再び問うよう言つ。

「それ以上抵抗するつて言うなら私も……」

「分かったわよ……普通の私に戻ります。だからアレだけはやめ
よ……」

前に受けた時はオーテコが赤くなつちゃつたんだから」

「何言ってのよ……ただのテコピンじゃない」

「ただのテコピンでも痛いの変わりないんだから、私は
痛いのが嫌いなの」

美月は額を数度撫でながら柔らかな細い目で京子見据える。
それに京子がため息混じりに言つた。

「まあーとにかく、本題に入りましょ。まずははじめここがどこで
どんな場所なのか」

「牢には間違いないと思うけど、それがわかつたところでどうする
べき?」

脱獄でもするの?」

翠真は彼女らにそう言つた。

実際、鉄格子を破るのは翠真にとつて造作も無いことだった。
鉄を碎け、と父上に言われ三日三晩鉄と格闘し、そして鉄をも砕く
すべを得とくしたのだ。何よりあらゆる武術を極めている
翠真にとつて鉄格子などボロ屋の脆い腐つた木の板のようなもの
軽く手を下せばやすやすと突破できる。

だが、その先が問題だった。

兵力は100人いるのか1000人いるのか、はたまた1000
0人いるのか

しかし、数はそれほど問題ではない。おそらくそれらは対処でき

る。

だが、この世界にやつてきたその時、突如放たれた異能な力
それが厄介だ、どういう力があるのか、何種類あるのか、未知の
力を使う
相手にどう戦えばいいのかわからない。

それに彼女ら一人の身を守りながらとなると、脱出はかなりの困
難になると翠真は考えていた。

「脱走つてそんなことできるわけないじゃない？ 武器も何もなく
てあんな
得体のしれない人たちにどう戦つていいの？ そんなことより
もここは
女の誘惑で……」

京子が赤色のブラウスのボタンを外しそれほど魅惑的とも思えぬ
小さな胸を
わずかにさらけ出し、大人のポーズを取りながら鉄格子の向こう
側にいる

男に対してもう一つの手招きを送る。

「看守さん……私……」
「おー、やめろって……」

翠真が頬を僅かに赤らめ、片手で目を覆い隠すかのようにしても
う片方の
手で京子を止める。しかしその手を払いさりに彼女は続けた。

「ねえー私を見て……ほら、ほら」

それに監視一瞬目を向ける。腰には無数の鍵がゆらゆらと揺れ、かけられている。

しかし、監視は京子の体を見た途端に鼻で笑い再び視線をテープルに戻す。

それを見た京子が突然涙目になつて、崩れ落ち、子供のように泣きが始めた。

「な、何よ……私の体が全然女として見えないって言つたの……やうなのね
絶対そつよ、だからあの男は鼻で笑つたのよー悔しさをよつも悲しさが勝つて
ぐう - - -」

するとそこへ、突如看守から声が上がつた。

「おおおー…」
「え？」

美月の氣の抜けた声が上がり、続くよつて京子の畳然とする声と共に翠真はその光景を見て畳然とする。

「京子、あのや……なんて言うか……ショック受けるなよ?
美月には生まれながらの人を釘付けにするような才能があるんだよ
多分、それは並の才能じゃなくて、本当に生まれながらの才能だからさ

京子が傷つくことはないよ……」
「フォローになつてないんですけど……」
「まあーとにかく落ち込むな……」
「無理よ」

「それでも落ち込むなよ」

「無理つたら無理！」

「なり……杭がなくなるぐらひまで落ち込めばいい」

「そうするー」

二人の会話が飛び交いつている最中、美月は白色の肌を豊満に育つた果実のような胸胸を両手で抱え、先ほどの京子と回じょつな姿勢をとつて

看守にアピールしていた。それを見た男は目を白色に変え、舌を出し、其場に盛つた猿のように不抜けた顔をして美月を見据えていた。

「あのわー今思つたんだけど、監視なんて誘惑しても何も得られないとんじやないかな？」

さらに言えば脱走を考えてないならなおさら監視を落とす意味がないのでは？」

よくよく考えてみれば、そうだ、監視など落としたところで何も話は进展しない、もっと偉い、地位のあるものでなければ意味が無いのだ。

「あ……そう言われればそうね。つて事は私達無駄に体をさらけ出したつてこと？」

「ああ……なんか存した気分」

「え？ そうなの？ 結構楽しいのにこれ」

「こりー もういいから服をちゃんと着なさいー。」「はーい」

美月と京子の二人が服をちゃんと着込んだ頃、突如上へと続いている階段の方から

無数の足音音が漏れ出ると、しばらくして数人の男たちが現れ、牢の前に立つと

一枚の紙を手に取りそれと中でいる一人の女を見比べるよう見て見ると、

紙を持っていた男がつぶやくように声を上げた。

「先ほど、抱きかかえられている姿を見てもしやと思いましたが…間違いない

行方不明中のお嬢様です！」

「そうでしたか……者共、早くこの小汚い牢獄からお嬢様を出して差し上げなさい」

「はっ！」

すると、牢の扉が開かれ、美月と京子の前で男は足を止め一人の前に跪き、

固く重い口調で男が言葉を漏らす。

「ロイネ・ニア・アルティース様、この度の部下の『無礼お許し頂きたい。

されど、なぜ、無許可で移動石を『』使用されたのですか？ あなたほどの

地位があれば移動石の許可など糸を切るほど容易く得られるでしょうに」

美月と京子は互いに目をあわせ首をかしげつつ囁く。

「あの～お嬢様ってどなたのことですか？」

それに男は京子の目を見据えて囁く。

「もちろんあなた様です」

「え？ 私はそんな名前じゃ……」

そう答えるも、後押しするように牢屋の外に立っていた男が一枚の紙を

京子の前に差し出し見せる。

京子はそれを見るやいなや驚くよじて声を上げた。

「写真…… それも私にそつくりな……」

「はい、間違いなくあなた様です」

「本当だー 京子が写真に写ってる」

覗き込むよじて美月がそつくり、男は口を開く。

「そう言えば、あなたが方は何者なのですか？ ロイネ嬢の使用者か何かですか？」

「使用者？ 私は使用者じゃなくて友達ですけど、それにロイ……」

そこで口をふさぐよじて京子が美月の口を抑えると、京子が翠真を見据えて

頷いた。

「僕も彼女とは友達です」

「そうでしたか、では我々と共に来てください。あなた方にも御無礼を働き

申し訳なく思つておつまます」

どうやら、この場所にいる翠真を含める3人以外は全員が京子をロイネという女性と勘違いしているようだ。

これは利用できる。翠真はそう思つた。

彼女らもそう思つてゐるだろつ。

この牢獄から抜け出すことができるのだから。

彼らの話からしてロイネといつ人物がかなりの位のお嬢様のようだ。

口から連れだされてもひどい扱いを受けることはないだろつ。なにより、写真を見た限り、京子の容姿とロイネといつお嬢様は双子のよつによく似てゐる。表面的にはばれる事はないだろつ。内面的なモノはやはりなんとかこまかすしかない。

どうであれ、今はロイネといつ人物になりすますほか道はない。京子もそれはよくわかつてゐるはずだ。

なにより、美月の口を封じたのがその証拠、今は彼らの後をついていき、

時を伺つのが上策。それにあの写真のことも気になる。翠真はそう思いつつ立ち上がり牢を出ると、男たちの後を京子や美月と共に追つた。

1話・牢獄と眞（後書き）

今日は後二度ほど更新いたします。

2話：20：00、3話：21：00

囚われていた牢獄より反日と馬車を北へ走らせた距離の頃。
日差しは沈み、街町に灯火がわずかに輝き自らの存在を尊重する
姿を素通りし一門の前にで馬車は停止した。

同時に馬の唸るような声が静けさに沈む暗闇の彼方へと消え去り。
息を荒げる馬の手綱を御者が引きながら馬車を開かれた門の中へ
と進め

大きく豪華な佇まいをした屋敷の扉も前まで歩きその足を止めた。

「お嬢様、並びにそのご友人方、到着致しました」

馬車の扉を開き、片手を胸に当てつつ執事のような黒く正装した
白髪混じりの老人が馬車の横手につき、しわがれ声を口にする。

それに体を伸ばしあぐび混じりに馬車から出る京子と美月。
翠真もその後を続くよつにして馬車から降りた。

すると牢屋で写真を持っていた老人が手を一度鳴らすと馬車は屋
敷の裏手へと

車輪の石を蹴る音と共に消えていった。

それを翠真は見据えつつ周囲に目を向ける。
辺りには無数の石置が点在し、すぐ前には階段と屋敷が佇んでい
る。

その屋敷へと続く数段の階段を執事のような形の老人は
一步また一步と進み、両手を中央に合わせながら進み
光沢を放つ趣きのある木製の大きな2つの押し扉の前で止まると

京子の目を見据えて、優しげな、それでいて懐かしむよつた優しい目で
その渴いた唇を開いた。

「ロイネお嬢様、おかえりなさいません。我々執事一同、メイド一同は
貴方様の帰りをどれだけお待ち申していたか、何よりも
ロイネお嬢様のお元気そうなお顔を見れて嬉しうう思います
「え、ええ……」

老人の信じきった眼が京子の胸を痛めたのか京子はどこか
申し訳なさそうな、それでいて罪悪感にさいなまれているような
表情を浮かべ
それを隠そと作り笑いを浮かべている。

そこで、翠真の耳元で美月が耳うつ用にして言葉を発した。
声と共に彼女の生ぬるい暖かな息が耳元をかすめ、花のよつた
甘い匂いが香つてくる。

「ねえー翠真君、面白いと思わない？ あの京子の申し訳なさそつ
な顔。

やつぱり悪いことすると、入つて心に抱いてるものを表情に体の
仕草に出すもの
なのね、プツフ
「面白くはないでしょう……京子は素直な子だからさ、多分
執事の事とかこの屋敷の人たちの事とかいろいろな人の心中を察
して

多分、今一番苦しいと思うよ、これつて笑えないでしょ
やつぱつと

それにわずかに微笑を浮かべていた美月が頷き
そつか、と口にすると落ち込むようにして自分を反省させ
黙りこんだ。

それを翠真は優しげなそれでいて柔らかな眼で見据え
彼女の髪を赤子のように優しく撫でた。

すると彼女は野良猫のように翠真の表情を伺い、見据えると
わずかに微笑を浮かべ、京子のとなりへと歩み寄つて行つた。
そして耳元で何かつぶやくと、京子の暗い表情がわずかに緩む。

そのすぐ後、田の前にある扉が木のしなる音と共に開き、中から
光が漏れる。

田の保養になる黄金色の光、蠟燭の煌びやかな暖かな陽光を思わ
せるその光に

溶けこむかのようによく合ひ、赤色の絨毯が地面にはしかれ
扉の先には一階へと続く階段が堂々たる氣品を漂わせながら存在し
それは中央で2つに別れ左と右へ道を作る。左右には花の形をか
たどつた

手すりが伸び、来客者を思わず見とれさせる設計となつていた。

なにより翠真を驚かせたのは、通路に並ぶメイドや執事服を纏つ
者たちの

京子を見た途端に見せた一斉のお辞儀、メイド喫茶が子供の遊び
ごとに思える
ほどの人を魅了する何か力のあるお辞儀だった。

同時に言葉が上がる。

「おかえりなさいませ、ロイネお嬢様」
「た、ただいま……」

その言葉に50人近くの一列にならぶメイドたちが微笑みを浮かべる。

「それではまず、お召し物」
「え、私はこのままで……」

「行けません、これより旦那様と奥方様の面前に出向くのですからお嬢様らしく気品のある服で出向くべきです」

京子は自らの姿を見据えブラウスの服を見て頷く。

「分かりました。貴方のいうようにします」

「そうですか。ではお連れの方もお召を変えをお願いしてもよろしいですか？ いたさかその格好では食事の時

旦那様や奥方様の目に触れますゆえ」

「分かりました。私はそれでもかまいません。どんな服を借りられるのか

楽しみだし、翠真君も同じ意見でしょ？」

「ええ、まあ」

「それでは客間にて客人一人はお待ちくださいますようお願いいたします。後にメイドのを数人出向かせますので、その時にお着替えを

ではまず、ロイネお嬢様は私について来てください。これから旦那様と奥方様に

合われる準備を」

すると、京子は顔を曇らせ、不安げに翠真に視線を向けてくる。それを翠真は大丈夫だ、と頷き答えた。

それからまもなくのこと、京子は執事に連れられ上の階へ翠真と美月は下の階段の裏手にある部屋へと通された。

部屋の中は長椅子が2つと多い騎士のよつた絵が描かれたかけ塾がかかり部屋の後部には庭を映し出すガラスの窓がある。部屋は学校の部室程度の広さがあり、左右には一本ずつ系4本の蠟燭が立てかけられ輝いている。

しかし、その他には何もなく、質素な空間だと翠真は感じた。そのまま美月の腰を下ろす長椅子に向い合つて置かれている椅子に腰を預け、対面し口を開く。

「京子のやつ大丈夫かな？ いつも気を張り詰めて男に負けんと部活とか喧嘩とか頑張つちやつ性格してるだろ？ 本当は気が弱くて、泣き虫で怖がりで、気持ちとは正反対の事をするからさ、今頃不安でダンゴムシみたいに丸まってるぞきつと」

それに美月が黄金色に輝く蠟燭の明かりを反射する柔らかな唇を僅かに動かし、片手を頬に乗せて優しげな声を漏らした。

「優しいね……翠真は、見てないようで人の心とか気持ちとか性格とか、全部見抜いてる。考えてないようでいつも人のことを考えて

考えて、考えぬいて、それでもまた考えて……自分のためじゃなくていつも人のために、本当の自分を隠して、みんなを幸せにしようとしている

そんな翠真だから私は……

「どうした？ 突然」

「いや、恥ずかしいセリフを長々と語つた美月はどこかうつむいた翠真の黒色の田を見据え、そして微笑んだ。

「いや、何でもないの、何でも……とにかく大丈夫よ
京子は弱いけど、強い女の子だもの」

「そうだな……」

それから数分と立つた頃、部屋の扉が開かれ、数人のメイドが様々な衣装をうでにして、入り込んできた。

その中の最も豊満な丸々とした腹を持つメガネをかけた白頭巾をする30代半ばのメイドが声を上げる。

「それでは、お召変えを行います」

「ああ、そこに置いといてください、自分でやりますので」

翠真がそう言つと、そのメイドは首を左右に振りそれを拒絶する。

「なりません、我々の仕事はお客様のお召えをお手伝いする」と
「ですので、心をお決めになられよ」

「いや……その、断る！」

「え？ ここで着替えるの？ だつて隣には翠真が……」

「大丈夫、殿方がおられる空間でも我々が壁となりお嬢様の
お肌をお守りいたします」

「え、そんな……きやあああ

「やめてください……やめ……」

一人の悲鳴に似た声が部屋に反響し、夜の空へと消えた。

純白の柔らかなベット上に少女は横たわるよつにして倒れ、戦意を失つた兵のようにうなだれた。

「私……もう無理です。私の純情は数分前に脆くも崩れてしまいました

お母様……」

黄金色に近い髪をベットに押し付けながら顔を何度も数分前のことを否定するかのように柔らかなベットにすりつける京子。

ベットは真新しい陽光を浴びた布団のような暖かな良い香りが香り胸に渦巻く露を僅かに和らがせる、がそれごときではこの嫌な感じは治まらない。なにより、腹と腰を圧迫する豪華絢爛なるこの赤色のドレスが憎らしうてたまらない。

京子は赤色に無数の刺繡を施された煌びやかなドレスを身に纏い耳にピアスと、両手に白色の柔らかな手触りの手袋をつけ背を高く、足を細く見せる踵の高い赤色のハイヒール履いてベットに埋まっていた。

それはすべて数分前のメイドの襲撃によつて素っ裸にされ取り付けられた品々ばかり。

体を翻し、京子は天井を見据えてつぶやいた。

「お母様が昔言つてたっけ……ドレスは女の鎧、男の心を射ぬくための戦衣装だと、で、私は誰の心を射抜けと言ひの？」

そこでちらりと脳裏に一人の綿りのない顔の男がよぎる。しかしそれを見て、左右に首を振つてかき消した。

「あいつは私の弟みたいなヤツよ？ なんであいつの顔が出てくるのよ。

それに急け者みたいにあいつは弱いんだから……」

自分に言ひ聞かせるよひにして京子はつぶやいた。

京子の理想の男は自分よりも強く、誰をも守れる立派で優しくて頼りになる、そんな男、先ほど彼女の脳裏に浮かんだ男に当てはまるのは優しいところだけ、それでは明らかに守備範囲の域を出ていない。

そこで、あの執事の声が扉の先から漏れ、京子は開かれた扉の先を見捨てて

慌てて大の字に寝ていただらしない格好を正し、股を開ざした。僅かに頬をりんご色に染め上げ、顔に熱が伝わる。

「ロイネお嬢様、旦那様と奥方様がお待ちです。私の後をついてきてください」

それに京子は慌てて頷き、ベットから降りよつとした。

「あれ……つあー」

足がもつれ、ベットのシーツを足に巻きつけ地面に無造作に倒れてしまつ。

慌てて体制を起^レしそうともがいていると、老人が喉を鳴らし急ぐよ^レに促す。

それを見上げて京子は再び顔に熱がほとばしる。

数秒の格闘の後、よ^レやくシーツから抜け出^レると、パタパタと服を叩き、立ち上がる。

「えへへ」

笑つて^レまかそ^レとする京子に執事は言葉を交わす。

「シーツの方はメイドたちに申しておきます。戻る頃には元通りになつて^レいるで^レしょう」

「お手数かけてすみません……」

「ロイネお嬢様が謝^レられることは^レや^レこません、我々の仕事は主に従^レい、仕事をこなすことなので、では、旦那様と奥方様のお部屋へ^レ案内いたします」

通路をすすむ度すすむ度、メイドたちが頭を下げて通路に立ち京子がすざまと

仕事にとりかかる、そんな光景を目につつ、大きな扉の前で執事は止まり

一度のノックをすると、萎れた花の如く、細く弱々しい皺のよる手の平で

扉をゆっくりと開いた。

扉の先から風が抜け、暖かな空気が京子の全身に吹き抜ける。執事は一例し中へ入り、声を上げた。

「旦那様、奥方様、ロイネお嬢様をお連れしました」

執事の視線の先には窓際のほとりにある無数の彫り物がされたテーブルに

膝を乗せ片手にマグカップを手にした初老の白髪と黄金色の髪があり交じった男と青色の

長く伸びた優しげな微笑を浮かべる婦人が一人椅子に腰を預け座っている。

二人の左右にはメイドが両手を中央に合わせ目を閉じたまま立ち尽くしている。

京子は開かれたままの扉の前で立ち尽くしそれらの光景を呆然と眺めていた。

そこで男から声が上がる。

「何をしてあるか？ 我が娘よ」

力のある暖かな声がそう耳にはいる。

見るからに優しそうな男、中年太りしているが纏っている空気や醸し出している空気が暖かく、居心地の良い物に京子は思えた。

しかし、京子の父は目の前にいる男ではない。

目の前の男は京子の事をロイネという少女と思っているようだが、京子はロイネではない。

その事が、重く、苦しく、京子の胸にのしかかる。

「ロイネ、よく戻つて来ました。一年もの間、心配しましたよ？」

続くよじにして男の横に柔らかな笑を浮かべている優しげな人が声を上げた。

見るからに優しそうな夫婦だ、そんな一人を騙すのはひどく心を痛めた。

今ここですべてをさらけ出したいとも思った。

けれど、それは自分一人で決めていい話じゃない。

ここには少なくとも翠真や美月がいる。

自分勝手なことはできない。

京子は重い足取りで一人の前にたち、ゆづくらとした言葉を口にした。

「ただいま戻りました」

「うむ」

「よく戻りましたね。母は嬉しいですよ?」

「戻つてそつそつ、悪いが、あの時のことは覚えておらつたな?」

「あの時の事……て?」

「忘れたのか? 婚儀のことじぞ」

「婚儀?」

「そうだ、お前がこの家を飛び出した理由だつた。それをも忘れたのか?」

「あ、いえ……」

京子がこの家の事を知つてゐるわけもなく、話にあわせるような形で

前の夫婦に口を合わせる。

「あの時は悪いことをしたと本当に反省してい。だから婚儀の事はもういい、お前の好きなように好きな男と恋愛をするがいい。それが

お前の幸せにつながるのならそれでワシらは十分だ」

「ありがとうございます……私の事を思つて下さり、本当に……」

親が勝手に決めた結婚など、誰が認めるものか、親の都合で結婚させられる

者にとつてそれは嫌いな物を無理やり自己満足で押し付ける最低な行為だ。

だからこそ、逃げ出したロイネと並んで自分によく似た少女に見て好感が持てた。

京子がうつむいたまましばらくの時が過ぎた頃、女が急かすように男の手を握り

男がそれに背を押されるようにして口を開く。

「ロイネ……結婚相手の男なのだが……明後日家で開かれる舞踏会に来ることになつておるのじゃが……そこで式を逃げ出した事や好意がないことを自分の口で言つて欲しいのだ。

そうでなければあの男はお前の事を諦めぬ

「わ、分かりました」

「頼むぞ、はあーすつきりした。今宵わ豪華にお前の友をもてなそうや」

「そうね、大切な娘の友だちですもの」

「うむ」

それからしばらくの後、豪華な料理の並ぶテーブルで翠真たちと共に

食を済ませ、そして翠真と美冴は密室の部屋へ、京子はロイネの部屋で眠る事となつた。

幅の広いベッドの上で京子はポツリと呟いた。

「やつぱり、私が謝らなくちゃならないのよね……何をどう謝るの？
私はあなたには興味がありません、とでも言ひへ。それとも
私にはもう好きな人がいるんです。とでも？　ああーわかんない
わかんないよ～」

頭をひどくかき回しながら京子はそのとこに付いた。

夜の帳が星々を包み、ほの暗い暗闇を作り大地を覆つている中、ティーディール王国、第三都市エーテリオンの貴族街に誇大な敷地と豪華絢爛なる佇まいの屋敷のテラスから翠真は吹き抜ける夜風を全身に浴びつつも茶の軍服に似た様相で空を見上げていた。

空に広がるは、無数の煌く星々と地球で見る月に似た姿の丸く大きな

母星が浮かんでいた。

この世界に来て2日、屋敷の人々にこの世界の様々な情報を聞き出すことができた。

さらに豊富な数の書物がこの屋敷には管理されており、それらの資料を物色することによって

歴史、文化、文字など、多種多様なことを学習することができた。文字に関しては書けはしないが、読むことは可能で、今思えば今までこの世界の人々と会話が成立し言葉を交わしていることから

何かしらの作用が三人の身に起つたと考えられる。それはこの

世界に来る前、三人が共通して体験したことになると、それがこの世界に来る前、三人が共通して体験したこと、そしてこの世界に来ることになった原因。

それらの要因をふまえ考へた場合、思い当たるフシはあるの意味不明な言葉

なんの規則性も意味のある言葉とも思えぬ『カルガギ・ザルカベシソ』と

言つ2つの言葉、なんの意味があるのかそれはわからないままだが、その

手がかりは掴んでいる。この一日間で書庫の本を物色していく内にこの世界ではカメラや写真といった人を『映し出すもの』は存在しない

事ががわかつた。つまり執事が持っていたあの写真はこの世界ではありえぬ

技術によつて残されたものだということ、何より執事からその写真について聞くことができた。

名前はアルヴァルス・クレイガー 王国軍第三騎兵隊隊長。

その男がこの屋敷に一年ほど前、ロイネが逃亡する前に隊長に就

任したことを

伝えるべくやつてきたという。この屋敷の主人、ロイネの父はこの国の軍隊に

通じる役職についている国の重鎮であり、挨拶に来るのは『ぐじぐく』

く当然の事。

その時、ロイネに一目惚れし、数枚の写真を常日頃持ち歩いているという

インスタントカメラと呼ばれる物でロイネを撮影し

その時に取られたのがあの写真だと、そして今日、その男がこの屋敷へやって来る。

昨日の昼間、京子にロイネの分かつた事を聞かされその時に説明された

ロイネと婚約を約束していた男がそのアルヴァルス・クレイガー だつた。

「アルヴァルス・クレイガー様、ご到着になられました」

翠真はその声に体を翻し声の上がつた方向へ目を向けた。

暗闇の広がる空から一転、煌びやかなドレスを纏う淑女たちと互いに言葉を交わす紳士たち、白色のテーブルに並ぶ

税の限つを 넘べしした豪華な料理の並ぶ会場が翠真の視界に飛び込んでくる。

しかし、翠真はそれらには目もくれず扉の先から歩み出していく
一人の男を見据えて近づいていく。
自然とその足取りは早足になつており、間もなく男の前に到達した。

だが、翠真よりも先に男と言葉を交わしている者がいた。

「あの……一年前の」とは申し訳なく思つています。ですが。私は
他に好きな方ができたのです……」

申し訳なさそうに謝るよく聞きなれた声、京子の声。

京子は水単色の長い三段のフリルの付いたドレスを空に揺らしながら

手を体の中央に重ね頭を下げながらそつと口にする。

それに茶色の額に無数の切られたような傷跡のある

薄茶色の胸に無数の勲章のような物がかかる軍服を着た男が髪を
上に掻き上げながら

わざわざ微笑し、口元を動かした。

「そうですか。では余計に貴方を私の者にしたくなりました。
私は昔から恋の壁が高ければ高いほど燃える質でして
必ずやあなたの心、奪つてみせますよ」

男の皿にはなんの迷いも同様もなく、真つ直ぐな瞳で京子を見据えてそういった。

それに、京子が困ったような表情を浮かべ、周囲を見渡し翠真を見つけるやいなや

腕を捕まれ、男の前に出されると、京子はとんでもないことを言い出した。

「わ、私の好きな方はこの方なんです。私はこの方が好きで好きでどうしようもなく

好きなんです。だから貴方に私の心はゆるぎません」

強い口調で、焼けになつてゐるかのように彼女はそういう。
それに翠真は動搖し、不抜けた顔で男の顔を伺つた。

男は微笑を浮かべながら鞄に手をかけ、懐からハンカチを丸めて翠真の胸元に頬つた。

それを翠真は拾い、手に取る。

すると、周りから突然野次馬たちの声が漏れ始めた。

「おい……決闘をあの男受けたぞ？ しかも相手はあのクレイガーダ」

「軍隊の方つてどうしてこもう決闘が好きなのかしら？ 私どもにはとんと理解できませんわ」

「死ななければいいがな……あの若者」

「わからないわよ？ 決闘と言えば真剣での真つ向勝負ですもの相手があのクレイガーダ様ならもしかすると……」

淑女たちが皆同じように扇で口元を隠しつつそう小言を言ふ。紳士たちは哀れみの視線を翠真に送つて来る。

「あのさあ……京子、お前のせいだ、なんか面倒なことに巻き込まれちゃつたよ？」

なんか物騒な話周りの方々はしてゐようだし、逃げていひですか

？」

翠真はやつ京子耳元でつぶやくと、京子は受けなさいと言わんばかりの

田で翠真を見据えてくる。

「決闘は一度受けたら両者のどちらかが負けを認めるか死に至るまで
続けなければならない事になつてゐる事は口イネ嬢の恋人である
坊ちゃんにもわかつてゐるはず、こゝは潔く剣を取り私と対峙な
されるが

懸命だと思つが、どうか？」

何か嫉妬の念を感じるその重々しいそれでいて道化のよつな子供
を相手にするような

ちやちな聲音を吐く男に翠真ため息と共にその言葉に頷いた。

「本当に私と決闘をするんですか？ 私は多分貴方に勝つてしまいま
すよ？」

「ずいぶんと自分の武を信じてゐるようだな？ だがそれは所詮は
習い事

程度の武、我々武人には通用しませんよ？」

「武人ですか……確かに貴方は武人のようだ。鍛えあげられた肉体美
使い古された腰にかかる剣、幾千もの戦いをぐぐり抜けたことを
証明する

頬の傷、そして他者に対する敵対心、確かに武人だ、しかし
貴方が武人ならば私は武神です」

「武の神にもひとしき力を坊ちゃんが持つてゐるとい？」

翠真はそれに何の迷いもなく頷く。

「ほほおーならばその力見せてもらいましょつか坊ちゃん」
「構いませんが、決闘と言つて、なにか得るものが必要だと思いませんか?」

「得るもの? ならば私は坊ちゃんが彼女と別れる事を望むどうだ?」

「構いませんよ。では次は私、私が求めているものは情報です」

それに男は眉を尖らせ、射るような目で翠真を見据えて言つ。

「それはつまり、軍の情報は欲しい」といひとか? それなり?」

男の言葉に首を左右に振り、続けるよつこにして口を動かす。

「私の求めている情報はこの国のことでも軍のことでもありません
貴方の持つてゐるインスタントカメラなる存在の事についてです」

その言葉に周囲の紳士淑女が首をかしげて皆回じよつな小言を口にする。

「インスタントカメラ? 初めて聞く名前ですわ? 貴方はご存知?」

「いえ、私も存じません。一体なんなのでしょうか?」

その言葉を聞いて、男は獣のよつたで翠真に言つ。

「そんな情報手に入れてどうする?」

「今は私には必要な情報なんですよ」

「ふん、まあいい。どうせアレの事は話したといひだしひつよつもないだろうから

話してもいい。それでは、互いに商品は決まつた。決闘は庭で執

り行おう。

血でこの屋敷を汚すのは忍びないからね

翠真はそれに頷く。

それら二人の会話を耳にしていた京子が翠真の耳元で耳うつよつ元に
して優しげな、それでいて不安に満ちる声音を漏らした。

「翠真……大丈夫なの？ そもそもアレは何？ 私は武神とか
武とは何かを悟ってるどこかの達人みたいな事言つてたけど
そんな嘘すぐにバレるわよ？ 戦えばすぐに」

彼女は知らない、翠真が武の高みへ上り詰めた最強を名乗る武術
家だと言つことを、

翠真は彼女に眠氣を誘つ微笑を浮かべ、つぶやいた。

「僕は大丈夫だから、心配しなくていいよ。あの程度の武人なら物
の数分で終わる」

「え？」

そう言つと、全身から存在とい氣配を消し去つ空氣のよつに闇の
ように

音もなく、存在することを認知すらできない程に静かにそして跡
形もなく

氣配を消した。

おそらく、この会場で彼の姿を捉えることができるものはいない
だろう。

歩いているのにそう見えない、存在しているの意識の外へ除外され
無いものとされる

完全に氣配を消した翠真は消した。

5話・インスタントカメラと男

翠真は歩き、テラスを抜け、下にある庭に飛び降りると、広く見通しのいい

芝生のしかれた場所へ立つた。

前には剣を構え、前を見る男の姿。

しかし男は翠真の姿を捉えていないのか辺りを見渡している。

翠真は自ら気配を再び放出し、その存在を男に感知させる。男の目には突然暗闇から振つて湧いたように翠真が見えただろう。実際に男の体がわずかに後ろへひるんだ。

「坊ちゃん、ずいぶんと気配を消すのに長けているようだな
だが、気配だけをうまく消せれたとしても積み重ねてきた
この拳と剣にはかないわしない。この決闘、剣を用いての戦い
坊ちゃんに勝機はないと思え」

そう言つと男は腰にかけていた一本の剣のつち、緑色の鞘をした剣を

翠真に頬る。それを翠真は受け取り手に取り抜き取つた。

月光の光がわずかに剣の刀身を輝かせ光を反射させる。
男も同じく剣を抜き構えの体制を取る。

男の全身から殺氣が溢れ出し、煮えたぎる鍋の水のよろこび空間を
覆つていく

翠真は表情ひとつ変えずにそれを見据えて宙に剣を躊躇せ、風を

切る音が

漏れ出ると、小さくつぶやいた。

「刀背打ちがいいですか？ それとも切られる方がいいですか？」
「坊ちゃんのくせに俺に手加減をすると？ ナメるな！」

男のいきり立つ声が静けさに包まれた庭園に反響するのを耳にして
翠真は剣を構え、向かってくる男に対して低く腰を落とし身構える。

「覚悟……！」

男の怒声が響くと同時に男の握られた剣が光を反射し翠真の体に
向けて
振り下ろされた。同時に翠真はそれを見切り、更に下へと体を下
げる。

背を風を切る音と共に抜けた剣が過ぎ、同時に翠真は片手に握る
鞘を

男の顎に勢い良く叩きつけ、上へと飛ばす。

男の体は宙を回転しながら舞い、数秒空を漂うと、地面へと落下
する。

その道中、翠真の剣が男の体を切り裂き、男は剣の振られた右へ
と勢い良く
飛んでいった。

それはわずか、数秒間で起こった恐ろしく早く、素早い攻撃だつ
た。

数秒間、何が起こったのかわからないまま沈黙が過ぎ、数分と立

つた頃

ようやく翠真が勝利したことをテラスから見上げていた者たちが
知り

換気の声を上げた。

翠真是軽く息を吐くと男の前に歩み寄り、片手でそれを持ち上げて
屋敷の使用人に男を伝言と共に渡し、そのまま屋敷の寝泊まりを
している

個室へとその姿を消した。

その翌日、一台の馬車が屋敷の中で止まり
馬車から降りてきた男が客前へ通された。

翠真是そんな彼を見据えながら客間の長椅子に座り、左右に
京子と美月を置いて男に座るように促す。

男の顔は昨夜の決闘で腫れ上がり、腹をかばうようにして
席へとつく。

「では昨晩の決闘の商品としてインスタントカメラの事について話
してもらいましょうか」

「そう急かすではない、話すさ、その前に……」

男は京子の方を見て言葉を続けた。

「私も男です、あなたの彼氏はこの私と対等にやり合ひ、そして勝
ちました。

これほど強い男があなたの夫になるのなら私は、貴方から身を引
きましょう」

「本当ですか？ よかつた……」

胸をなでおろすかのように京子が囁つと、風邪声の美月が声を上げる。

「コホ、コホコホ、よかつたね……コホ」
「うそ」

咳混じりにそう言つ美月を見て、男が眼の色を変えたように美月の手を取り田を見据えて、胸踊るような声を上げた。

「一田見た時から貴方の事が好きになりました！ どうか私とお付き合いで！」

それに美月が暗く蔑んだ田で見据え、即答した。

「貴方は私の趣味ではありません。丁重にお断りいたします」

それを聞く男は首を振り、

「私は諦めませんよ！ きっと貴方の心を射止めて見せます！」

この男、必ず将来、女がうみで死ぬ、もしくは殺される。そういう真は思った。

そういう思われたのは彼女らの醜しだす殺氣と綺麗な女を見れば全てに

一田惚れしそうな性格の男を見た結果がそつ告げてているからだ。

「諦めの悪い男は嫌われますよ？ おたふく顔のお兄さん」

美月がそう口にすると、男は首を傾げる。

なぜかそれで微笑を浮かべ、さらによく美月の手を握る。

昨夜の彼の凜々しく整った顔つきの面影はみじんもなく腫れ上がった頬がおたふくのよう今、彼は見える。

「おたふくでもなんでも私はあなたを幸せに……」

「フフフ、私の奴隸になるなら考えてあげなくもないわよ、口ホ

……」

「美月！　変なこと言わないの！　女王様の氣があると思われるわよ？」

「だつて、この人犬みたいなんだもん」

「犬つてあんた……」

「美月、落ち着けつてこんなところで『プレイは』法度だぞ」

美月は落ち込むかのよつにして方をすくめ、ため息を履く。これ以上目の前の男に場をかき回されたくない。そう思い翠真は本題を切り出すことにした。

「クレイガーサン、单刀直入に言います。インスタントカメラはどこので

「どうやって手に入れたんですか？」

それに男は、

「ああ、そういうやーそういう話だつたな。えつと……」

男は腰にある無数の革袋の中から何かを手に取るとテーブルの上に載せた。

それは茶の色をしたカメラ。

それを見て美月と京子が声を上げる。

「どこかで見たことあるような……」

「うん、確かにこれ見たことあるよ? でもどこでだっけ……」

一人が唸るようにして言つと、男が口を開く。

「うんー」のインスタントカメラに出会つたのは10年くらい前になるかな

まだ新米だつた歩兵の頃、ボロ布を纏つた男に出会つてね、その男に剣と食べ物を譲る代わりにもらつたんだよ。名前も顔ももう覚えちゃあーいないがな

「10年前にもらつた……そうですか、その男と何か話しましたか?」

「うんー特に何も話してないな、ああ、そういうえば妙なこと言つてたな」

「妙なこと?」

「ああ、世界がどうとか、俺のいるべき世界じゃないとか
訳の解らん言葉を何度もいつてたよ」

その言葉に三人は顔を見合わせ頷く。

「多分その人私たちと同じようにこの世界にやつてきた人だよ多分」「つてことは私達の他にもこの世界にはこの世界の住人じゃない人が暮らしてゐるって事?」

「そうなるだらうね、このカメラだつて明らかに僕らのいた世界の物だから

多分少なからずそういう人はいると思つ。この世界から元の世界に戻る

方法も見つかるかもしれないし。僕らは旅をする必要があるかもしないね

京子はともかく僕と美冴はこれ以上の家にやっかいになるわけにはいかないし

「うん」

彼ら二人が頷くと、男が再び口を開く。

「そう言えば、その男は魔法に関することを調べているとも言つてたよ

だから俺は魔法で有名な国オルガリオンの事を話したんだ。
その男の探してるならそこへ行つてみるといい。いなくとも
面白いものが見られるぞ」

「オルガリオン……確かにそこから南に1ヶ月ほどかかる距離にある
国ですね？」

「ああ、徒歩だとそうなるが、移動石を使えば2日とかからず到着
するだろ？」

で、俺の話すことはすべて話した。他に質問がなければ俺は帰る
ぞ？」

「ああ、もうありません。今日はありがとうございました」
「決闘での儀を通したまでのことで、ではまたいづれお会いすること
もあるでしょう

では

やう言つと男は部屋を早く出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255y/>

魔法と剣のある異世界物語

2011年11月23日19時13分発行